

発刊の辞

相澤 正彦

本専攻で東洋・日本の仏教美術史を担当されてきた清水真澄教授が、今年三月をもって退任を迎えられます。

清水先生が成城大学に赴任されたのは、昭和五十七年四月、四十三歳のことで、かれこれ三十年近くの歳月が流れています。

成城大学に移られる以前は、神奈川県立博物館（現 神奈川県立歴史博物館）に学芸員として十五年間在職されてきました。県内での先生のフィールドは主として運慶作品をはじめとする鎌倉時代の仏教彫刻でした。今では当たり前になりましたが、各地域の寺社の仏像について、新旧の時代を問わず悉皆調査した上で、精緻な調査報告書を写真図版とともに公表する、という労多い仕事を手掛けられた先人の一人が先生に他なりません。この実地調査の積み重ねにより、多くの重要作例を世に紹介され、そのもつ意義を知らしめてこられました。その姿勢は後進の学芸員たちに伝えられ、今でも神奈川県は仏像調査、研究のもっとも進んだ地域となっています。

それらの仕事の中で、とりわけ力を傾けたのが、卒業論文以来続けてこられた仏教彫刻の至宝ともいえる鎌倉大仏（高徳院阿弥陀如来像）の研究でした。先生の最初の記念すべき著作もこの鎌倉大仏についてであります。

その後の探求も絶えることなく、つい近年の論考まで引き継がれています。高德院御住職のご子息が芝中学時代の刎頸の友であったということも、大仏様が導いたえにしと言えるものかもしれません。

ただし先生の研究は、地方彫刻という限られた範囲にとどまるものではありませんでした。昭和四十九年に『國華』誌上に発表された「仏師院広とその作例」は、古代中世彫刻史上において、大きな潮流を形成した院派仏師に最初に光をあてた画期的な論文でありました。そこには中央の流れと地方の流れを常に念頭に置きながら、そのパースペクティブを測りつつ総合的な彫刻史観を形成していく、という先生の研究の基本的な姿勢がすでに定まっていたことが読みとれます。

もっとも先生は、仏像を単なる研究の材料としてのみ、みなしていたのではないことも強調しておかねばなりません。先生の報告書には、時代も新しく破片仏のような作例まで取り上げられています。そこには、些細な遺物でも、その地域の信仰や文化を伝えるものとして、現時点での形と評価を確実に後世に託していく、という大きな使命感が流れています。

このようなフィールドワークは、本来、先生が好まれるところであり、知られざる仏像と邂逅する期待感に加え、当地の人々との出会いも大きな喜びであったとよくおっしゃられています。先生の幅広い交流が研究者や文化財関係者、出版人にとどまらず、各地域の篤志の人々に亘っているのも故なきことではありません。

◇ ◇ ◇

先生は博物館の仕事の決算として『神奈川の彫刻―100体の仏像を見る―』という、これまで県単位ではなしえなかった圧倒的な規模と質を持つ空前の展覧会を企画開催することで、学芸員生活に区切りをつけ、成城大学に転じます。

成城大学でも、今度は学生を連れて、計画的な悉皆調査をたびたび試みられています。とくに当時、手付かすの状態であった岐阜県下の仏像調査に精力的に着手されたことはよく知られるところです。成城大学仏像調査団の名のもとに、矢継ぎ早に出された本格的な報告書は、学界に寄与するところ大であり、成城大学の仏教彫刻研究の学術的な水準の高さを知らしめました。そのかたわら、法政大学、青山学院大学、鶴見大学、東京工業大学、沖縄県立芸術大学などで、仏教彫刻史や博物館学の講座を受け持たれ、その薫陶は他大学の学生にまで及んでいます。先生は授業、調査を通じ、学生への指導は時によっては厳しく、それは礼儀作法まで及んだと聞き及びます。しかし、その甲斐なく？ 先生の目は怒っているのですが、いたって温厚円満な相好風姿が災いしてか、これまでの指導学生の多くには、懇親の席上で見るような屈託のない和やかな先生のイメージしか残っていないようです。

大学以外の社会活動として知られますのは、三井記念美術館が日本橋に開館して以来、館長として昔と変わらず美術館活動を推進しておられることです。同時に、国の文化行政の重要な役割を担う文化庁文化財保護審議会、文部科学省独立行政法人評価委員会（国立美術館・博物館部会）などの委員を歴任されたのをはじめ、各地方自治体の文化財保護審議委員等を数多くつとめられ、我が国の文化財行政・保護の施策に尽力してこられました。これら審議の席上では、研究者や学芸員の立場にたった姿勢を堅持し、幾度となく行政側に諫言を呈されたと聞いていますが、その反骨ともいえる研究者魂は博物館時代に培われたものと言えましょう。

◇ ◇ ◇

先生は多芸な人としても知られています。

今ではあまり想像できませんが、東北大学時代は川内テニスクラブ主将という肩書きを持ったエースでした。

また芸術一家に生まれたということもあるのでしょうか、平成十年に青森県八戸市のオブジェコンペに密かに応募し、見事一等に輝きました。ほとんど見た方はいないと思いますが、今でもそのブロンズのオブジェが、八戸市縄文学習館の前庭に立っているそうです。そのほか、水彩画ものし、法政大学機関紙の表紙の絵を長い間、連載執筆されていました。そして日ごろから嗜まれているのは言うまでもなく動物園巡りでありましょう。「清水あずみ」というペンネームを持つ動物園評論家がどこぞかにおられるようで、この人は斯界きってのエッセイストとしてけっこう高名であると聞いています。

このような先生を見ていますと、人間は仕事においても趣味においても幅広さをもち、何事もきちんと全うできねばならない、といったやや頑なともいえる矜持を自らに課しているように見受けられてなりません。

そのような御人柄か、先生は多忙な人、としても知られています。

これまで断われた仕事など数えるほどではないのでしょうか。大学の公務においても学園評議員、学園理事などを何期もつとめられ、さらに成城短期大学学長、成城大学学長を歴任されました。固辞し続けた学長職も皆に推されて最後は引き受けられたのも、考えようによってはその矜持ゆえのことかも知れません。とはいえこれらの労多き仕事を一つの愚痴も言わず、いかにも淡々と、時には楽しげにこなされているかのように思わせるところに、先生のダンディズムがあるともいえます。人間一人ひとりが何らかのかたちで社会に奉仕するともに、自らの人生を存分に楽しむ、良き市民でありたい、ということが、先生の信条であったと思われるかもしれません。

◇ ◇ ◇
さて、先生について誰しもが知るところが、悠揚迫らぬ酒仙であるということです。五時を過ぎれば必ず酒杯

を傾ける、いわば昼と夜の二つの人生を生きてきた、といっても過言ではないでしょう。先生にとって、酒中の人生は二倍にも三倍にも楽しいひと時であったと思われますので、これまでの人生を合算すれば他人の五倍も六倍にもなるに相違ありません。

とはいっても、それでは、あのような煩雑な仕事をいつこなし、膨大な著作をいつ書かれていたのか、誰しもが今もって謎とするところです。

ここで私の知る限りの酒仙清水の逸話を紹介したいと思うのですが……、じつはこれといってお話することがないのです。というのも先生の酒は、春の海に小舟を浮かべ悠然と漂っているような、いたって清々しく穏やかなもので、実際のところ昼の日常とほとんど変わるところがないのです。

かくいう先生もこのような大人の風とはうらはらに、細やかなところもあり、いや細かいところもあり、ささいな仕事にもこだわって最後は自らが出てきてしまう、という好ましい欠点があります。つい先日にも退任祝賀会の段取りが万事整ったと思いきや、「ボクはなにしろ成城が好きだから皆で校歌を合唱したい」と言い出しました……。やれやれ、また歌詞カード、作らなくっちゃ。

最後になりましたが、美学美術史専攻の教員一同、先生のこれからの人生が、これまでもまして、栄光あれや、と願ってやみません。

今年度の『成城美術史論集』は、われわれが愛すべき清水眞澄先生のご退任を祝し、古希を賀す、その記念として発刊するものです。

(美学美術史専攻主任)